

オリナス
orinas

京都大原記念病院グループ 広報誌

vol.2 / 2021.04



特別対談

「医療連携室」の活動から見えてくるもの

Kyoto Ohara Memorial Hospital Group

「医療連携室」の活動から

見えてくるもの

京都大原記念病院グループ（以下、グループ）では、リハビリテーション病院を中心に、医療・介護サービスのネットワークの面展開で、丁寧できめ細やかなサービスの提供に努めています。そのなかで、患者様を中心に様々な人をつなぐ役割を担う「医療連携室」の活動を通じて見えてくるものを、室長の三橋尚志医師と、副室長の児玉直俊医師に聞きました。



三橋 尚志

Takashi Mitsuhashi

京都大原記念病院グループ
医療連携室 室長

京都大原記念病院 副院長
一般社団法人 回復期リハビリテーション病棟協会 会長
日本リハビリテーション医学会 指導医
日本整形外科学会 指導医
日本リウマチ学会 指導医



児玉 直俊

Naotoshi Kodama

京都大原記念病院グループ
医療連携室 副室長

京都近衛リハビリテーション病院 院長補佐
日本リハビリテーション医学会 専門医
日本循環器学会 専門医 / 日本内科学会 認定医
日本心臓リハビリテーション学会 指導士
義肢装具等適合判定医

はじめに、お二人が室長・副室長を務められている「医療連携室」とは何かを教えてください。

三橋尚志医師（以下、三橋）—— 我々の病院は地域医療の「回復期」というステージを担っています。病状が不安定で緊急性を要する期間（急性期）で治療を終えた患者様が、自宅や社会に戻ってからの生活を少しでもその人らしい状態にするための「リハビリテーション（以下、リハビリ）」を専門としています。

そのなかで「医療連携室」が担う

地域連携には2つの役割があります。一つ目は、リハビリを目的とした患者様を受け入れるための急性期病院等との「前方連携」、二つ目は、患者様がご自宅や社会へスムーズに戻れるよう退院支援を行う「後方連携」です。

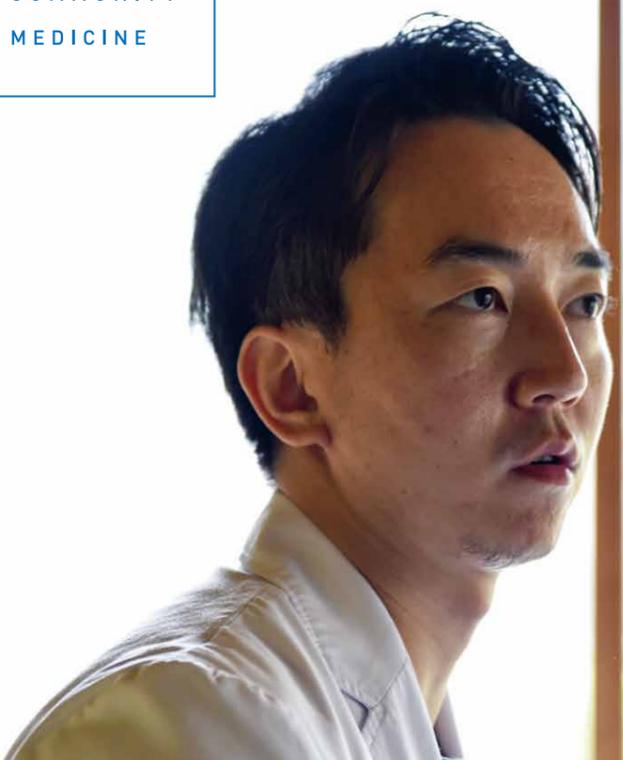
児玉直俊医師（以下、児玉）—— 医療連携室は、「京都大原記念病院」と「京都近衛リハビリテーション病院」の2拠点で、三橋先生、私の医師2名を含め、看護師、理学療法士、医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）、事務職の総勢19名で活動しています。直接的

な支援は相談援助職の医療ソーシャルワーカーがメインに担います。看護師に加えて、3年前から理学療法士が入院時に関わるのも特長です。

〈回復期リハビリ病院〉として、大原の環境は活かされているのでしょうか。

三橋 —— 大原の自然環境を最大限活かすことが〈回復期リハビリ病院〉としての成長につながったという感じですね。四季の風景、草花の香りは良い刺激になります。

SPECIAL
TALK:
COMMUNITY
MEDICINE



〈撮影時だけマスクを外しました〉

特別対談

「医療連携室」の活動から
見えてくるもの



児玉 — 患者様は約3、4か月を過ごされますが、病室や訓練室だけだと時間が止まっているように感じる方もいらつしやいます。自然からの刺激は魅力だと思えますね。入院されている患者様同士の関係性もかなり強いですよ。

三橋 — ある意味特異な立地のため、他にできないコトをやるうと挑戦しつつ、様々な技術を積極的に取り入れて「病院の魅力づくり」を行ってきたのが良かったと思います。多機能な回復期リハビリ病院として、訓練の場、生活の場をより良くしようと工夫を重ねてきたことが強みになっていますね。最近の「グリーン・ファーム・リハビリテーション®」もまさにそれにあたります。

児玉 — とはいえ昔は、患者様の紹介を得るのが大変だったと聞きますが…

三橋 — 昔は、リハビリそのものの理解も進んでいませんでした。今なら当たり前のようにリハビリが必要と判断される患者様も、当時は積極的に取り組む機会を得られないということもしばしばでした。

グループ代表からは「私たちが何をしているかを知ってもらうためには、汗をかかないといけないだろうな」と常々言われていました。

いろいろな苦労があったでしょうね。

三橋 — そうですね。対応に悩む重度のケースも、多職種チームで数多く乗り越えて来ました。結果として、現在も重度の方や認知症の方への対応はどの職種も秀でていると思っています。また、急性期病院の人たちが予想もしないような良い結果を、うちの多職種チームが次々と出し続けてきたのは素晴らしいです。

予想もつかないような結果ですか。

三橋 — 急性期病院の先生方が「もう歩けないだろう」と思っていた患者様が食べられるようになった。一つひとつ、取り組みを積み重ねてきたことで理解が広がってきました。

児玉 — 長年の実践で築かれた信頼ということですね。



2021年3月25日 京都大原見玉山荘(京都大原記念病院敷地内)にて

三橋 — そうですね。スタッフ力の賜物というか…。当初は、スタッフみんな本当に大変だったと思います。だからこそ、今でも受け継がれているのが誇らしいですね。

先日、ご家族がずっと付き添わなければならぬほど認知症が進み、毎晩とても大変だったという患者様を受け入れましたが、うちに来られたら、その日の晩から穏やかにられました。

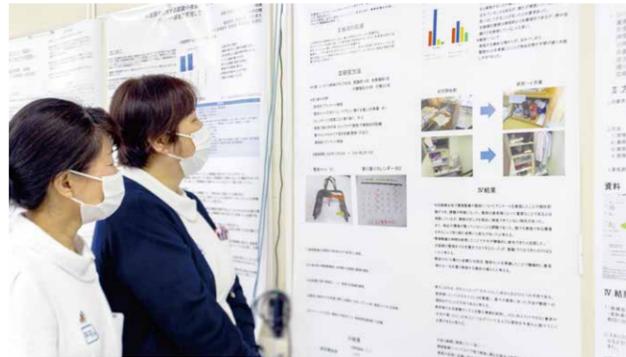
その晩からですか。

三橋 — 回復期リハビリ棟が制度化される前から実践で培ってきた対応力があるのだと思います。児玉先生がおられる「京都近衛リハビリテーション病院(以下、京都近衛リハ病院)」にも、受け継がれているのではないですか？

児玉 — はい、確かにそうですね。「京都大原記念病院」で鍛えられたスタッフが「京都近衛リハ病院」の立ち上げメンバーとして、新しいスタッフを巻き込んでチームづくりをしています。

2018年に「京都近衛リハ病院」ができて3年経ちました。街中の大通り沿いにあることもあり、色々な急性期病院や、一般の患者様からいろんな期待も受けられると思いますが、どんな感じですか？

児玉 — そもそも世の中の的に、急性期病院の入院期間短縮が求められていることを受けて、より早い段階で受け入れる拠点となるために開院されました。そんな背景もあってか、癌治療中であるとか、心臓にトラブルを



京都府作業療法士会主催 事例報告で「優秀賞」を受賞

京都府作業療法士会の「事例検討会」で、小森奈々療法士、松岡ささと療法士がそれぞれ「優秀賞」を受賞しました。代表して小森療法士(京都大原記念病院)に話を聞きました。

「70代の専業主婦、脳梗塞後の高次脳機能障害により、段取り良く活動したり、身の回りに注意を払いづらくなった患者様に、ビデオを使った動作の振り返りや、メモで事前に段取りを確認するなど気づきを提供し、改善につながった事例を報告しました」今回の受賞に「これを励みに、これからも頑張っていきたいと思えます」と抱負を聞かせてくれました。

看護介護部 院内ポスター研究発表を実施

看護介護部が、日々の現場での気づきや取り組みを院内で共有し、看護・介護の質向上の機会とすることを目指し、院内研修ルームで「研究発表(ポスター展示形式)」をしました。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2020年からグループ研究大会の開催を自粛していることから、規模を縮小して試みた取り組みです。「症例報告」「職員の意識変化」「業務改善」などをテーマとした6演題が発表され、看護師、介護職を中心に各発表を閲覧し、学び合いました。今後も看護・介護の質向上を目指し、工夫を凝らして取り組んでいきます。



写真左が八木彩香医師



御所南クリニック八木医師 読売健康講座で講演

3月20日にオンラインで開催された読売健康講座「今学びたいパーキンソン病と“おうちトレーニング”のすすめ」で、御所南リハビリテーションクリニックの八木彩香 医師が講演しました。当日は約80名の参加者に向けて、いずみ脳神経内科 院長 和手麗香 医師とともに、講演や対談形式でパーキンソン病の基礎知識と治療、パーキンソン病とうまく付き合うためのおうちトレーニングをテーマに、2020年5月に御所南クリニックで制作した「自主トレーニング動画」の一部も用いて実践形式で紹介しました。動画は御所南クリニックのウェブサイトから閲覧可能です。

1,300通りの想い、ウェブサイトで連載中

「患者様・ご利用者の心に寄り添い、不安を取り除く」職種や立場によらず大切にこの価値観を胸に 約1,300人のスタッフが描くそれぞれの想いをお届けするインタビューコーナーを「1/1,300の想い」と題し、グループのウェブサイトで連載中です。

リクルートサイトでは、若手を中心に、迷ったり、悩んだりしながらもそれぞれの想いを大切に現場に臨む日々を。グループサイトでは、過去のインタビュー記事も含めて、中堅からベテランスタッフ、管理者などが診療やケアに対する想いを聞かせてれています。今後も定期的に更新して参ります。ご興味があればぜひご覧ください。

長年、患者様のリハビリの方針を検討する月1回のカンファレンスにご家族にも参加いただくことが定着していますよね。

児玉 — 大原でもそうですが急性期病院と連携して診るケースが増加しています。大学病院の専門チームに診てもらおうとか、外来受診と連携するとか、そういう形で受け入れることができています。しかし、その分、個別の対応が必要です。スタッフの対応力には、本当に頭が下がる思いです。

何か工夫されていることはありますか？

抱えているとか、これまで以上に全身管理が必要な患者様が多いです。私自身も「循環器」が専門ですから、その知識も活かしています。



三橋 — 「支える」ですね。まずはその人ができることを伸ばすためのリハビリに取り組むべき(リハビリ前置主義)というのが(回復期リハビリ病院)の重要な考え方です。「してあげ」

児玉 — やっぱ、スタッフのチカラは大きいですね。個々のスタッフの対応をみると、一人ひとりの患者様の人生に向き合い「支える」ことが、一番大切だと思います。

「と混同して、介護保険サービスに頼る前提の支援を行うと、かえってその人らしさを奪いかねませんからね。住み慣れた場所での暮らしを暮らせる地域づくり(地域包括ケアアシテム)のためにも、その視点が大切です。その意味ではリンクする考え方だと思っています。

我々が最終的に目指すのは、地域への貢献です。患者様、一人ひとりとミクロに接していくと、地域の全体像やマクロの問題が見えてきます。一人ひとりの患者様に人として向き合うことが、より良い地域づくりに繋がると思います。患者様との顔の見える関係づくりを、これからも大切にしていきたいですね。

児玉 — 医療連携室として、私たち(医師)がグループの介護サービスにも踏み込んで関わる体制ができていますから、医療、介護の「面」で支えるという意味でも築き上げたいです。スタッフと共に医療と介護の両輪をまわしていきたいですね。

お問い合わせ
京都大原記念病院グループ
医療連携室
TEL 075-744-2050

らしいものになってほしいとの思いを大切に、これからも頑張りたいと思います。





京都大原記念病院グループ
KYOTO OHARA HUMAN CARE NETWORK

orinas
オリナス
について

患者様、ご利用者、ご家族の心に寄り添い不安を取り除くために、職種や組織、医療や介護の枠にとらわれず、人や地域と織りなすつながりのなかで生まれる様々な場面を季節ごとに紹介します。

お問い合わせ

TEL / 075-744-3121 (代表)

FAX / 075-744-3126

MAIL / kouhou@kyotoohara-gr.jp



WEB



Facebook